



『日本と欧州の文化の違い』

齋藤友隆*

私は2011年7月からベルギーにある弊社の欧州・アフリカ地域統括会社 Toyota Boshoku Europe N. V.で海外研修を行っている。ベルギーで過ごした約半年の中で感じた日本と欧州の国々との文化の違いを紹介する。

ベルギー王国は主に2つの公用語、フラマン語とフランス語をもち、それぞれの言語を話す地域によってフラマン語圏のフランダースとフランス語圏のワロン、そして首都ブリュッセルに分かれている。

ベルギーの国旗は黒・黄・赤の3色で構成される。調べてみると、黒地に赤い舌を出した黄色いライオンという伝統的な紋章が起源とあった。美食家の国らしいジョークとして、黒はチョコレート、黄色はワッフル、赤はチェリービールといったものもある。

私が住んでいるのはベルギーの首都ブリュッセルである。ブリュッセルは人口約100万人の都市で、欧州連合(EU)や北大西洋条約機構(NATO)の本部があり、様々な人種の人たちが行き交う国際都市である。街の中心にあるグランプラスはヴィクトル・ユゴーが世界一美しい広場と称えたことで知られる。ベルギー国内には他にもブルージュやアントワープなどの美しい街がある。

ブリュッセルから車で2時間走れば違う国になる。東に走ればビールの国、ドイツであり、西に走ればワインの国、フランスになる。陸続きということもあり、ベルギーは多国籍な国である。そのため、ベルギーを含む欧州の人々は当然のように複数の言葉を話す。彼らに言わせれば『1つの言葉だけで隣人とどうやってコミュニケーションをとるのか?』ということらしい。確かに社内でも、様々な国籍のスタッフが使う日本語、英語、フランス語、フラマン語、トルコ語などが飛び交っている。一つの言語だけで物事が進んでいく日本が特殊な国だと感じ始めている。

社内を見ているとローカルメンバーの日本語の上達に驚くことがある。挨拶や数の数え方などを互いに教えあうこともあるが、何よりも我々日本人が使うちょっとした日本



語にも興味を持って質問をしてくるのが上達の要因だと思われる。『どっこいしょ』と『よっこいしょ』の違いを聞かれた際には、私自身考えたこともない違いであり、できる限りの説明をしたが納得してもらえなかった。この、言葉に興味を持って質問をすることが非常に難しいと感じる。英語はまだしも、フランス語やフラマン語は『わからない』で片付けてしまい、興味を持つまでに至らない。頭の中をグローバル化するキーワードも興味をもつことだと感じるが、対象が言葉となると難しい。成形加工に関わる者として最も興味があることは、プラスチックに関することが日本とどう違うのか、という点である。

興味を持っていると、身の回りにあるプラスチック製のキャップでもヨーロッパと日本との違いに気付く。例えば、ベルギーで買ったパイプ洗浄剤のプラスチックキャップの開け方が分からず悩まされ、イタリアで買った一部のミネラルウォーターのキャップは固く締められていて開けるのに苦勞をさせられた。おそらく使い方や体格が日本(人)と違うのが原因だと思われるが、逆に言えば日本用に設計されたものが欧州で同じよう通用するとは限らないと感じている。

ビニール袋でも違いがある。ローマで渡されたレジ袋は生分解性ポリマー製だと書いてあった。日本では見たことが無いもので、これは環境意識の高さが反映されているものと思われる。また、日本のゴミ袋では入れていいものを文字だけで表示していることが多い。一方、ブリュッセルのゴミ袋は絵だけでも分別が理解できるように工夫されている(図1)。ほぼ日本人で構成される国と多国籍な人々が集まっている国の違いは、日常の様々な場所に存在する。時間の感覚も日本とは異なる。例えば、欧州では朝早く

* Saito, Tomotaka
トヨタ紡織(株)基礎研究所
刈谷市豊田町1-1 (〒448-8651)
tomotaka_saitou@toyota-boshoku.co.jp
2012.3.15 受理



図1 ブリュッセルのゴミ袋

仕事に来て早く帰るといふ傾向がある。遅くまで働かなければいけないのは仕事ができないからだ、という考え方が根底にあるためである。一方、日本人は遅くまで仕事することに慣れていて、この考え方の違いにより、夜遅くなるにつれてオフィスの日本人比率が高まっていく。

上述したような違いはあるが、日本も欧州も変わらないと感じることもある。

2011年8月、ロンドンで暴動があった翌週に出張でロンドンに行く機会があった。どうなることかと思っただが、夜に1人で街を歩いていても不安に感じることはなかった。調べてみると暴動があったのはロンドンの郊外であり、中心部は安全だといふ。また、2011年12月にデモ隊と治安部隊の衝突で10人を超える死者が出た翌週にエジプトを旅行したが、危険どころか観光客が少ないこともあり行列することもなくベストシーズンのギザ観光を楽しめた。現地ガイドによれば、大規模なデモはタハリール広場周辺だけで行われ、その他の場所を旅行するには問題ない、とのことであった。確かにタハリール広場に近づくにつれ、警察官の数が増えていったことを覚えているが、ギザは平穏だった。現地をよく知らない私は、ロンドンやエジプト全体に危険なイメージを持ってしまったが、一部の地域で起きた出来事で都市や国全体に間違ったイメージを持ってしまっていた。しかしこれは私に限ったことではなく、欧州を含む世界の人々も同じだと感じる。

世界のどこに行っても相手が日本人だと分かる地震と原発事故の話題になる。なぜなら、世界に流れる日本の

ニュースは東日本大震災とフクシマ原発の事故だけだからである。日本をよく知らない海外の人たちには、ガレキの映像の国が日本なのである。日本にいたときは、日本からの輸出品に対する放射線検査が行われていることに対して不快感すら覚えたが、日本のテレビを見られない私のアパートでCNNやBBCを見ていると、放射線検査は当然だと感じてしまう。情報を正しく理解することの難しさを感じている。

ここからは私が参加した学会と大学を訪問した際に感じたことについて述べる。

イタリアでAIM (Associazione Italiana di Scienza e Tecnologia delle Macromolecole) 主催のイタリア国内の学会、XX Convegno Italiano di Scienza e Tecnologia delle Macromolecoleに参加した。イタリアの高分子研究トレンドは基礎的なものよりも、応用研究(特に高分子の難燃化技術の開発、100%天然素材を使ったコンポジット材料の開発など)に注力していると感じた。ポーランドで開催されたPolymers for Advanced Technologies 2011にも参加したが、やはり応用研究に注力しているように感じられた。この理由は研究費が取りやすいことと、EU諸国での中心テーマであることが大きい。

大学訪問ではイギリス、University of Oxford, Begbroke Science ParkのProf. DobsonとProf. Grantを訪問した。Prof. Grantから研究内容について説明していただいたが、そのアイデアは非常に興味深いものであった。ベルギー、University of MonsのProf. Duboisの研究室とUMONSの研究機関であるMateria Novaを見せていただいた際には充実した設備と人員を羨ましく感じた。また、南アフリカ、Council for Scientific and Industrial ResearchのProf. Rayの研究室では学生の実験に立会いながら研究内容をじっくりと説明していただいた。実験のノウハウを含め、文献を読むだけでは分からないことがあるが、現地に行って現物を見ながら話を伺うことでより理解が進むと感じている。

赴任当初は左ハンドルに右側通行、信号の位置も制限速度も違うため運転一つでも緊張の連続だったが、半年滞在していると慣れ、陸続きでどこでも行ける便利さを満喫している。日本との違いを受け入れることができれば、海外生活は悪くない。1年間という限られた期間の中であとどれだけの違いを見つけられるかを愉しみたい。

末筆に、大学訪問にご協力をいただいている豊田工業大学岡本正巳先生に感謝申し上げ、締めくくりとする。